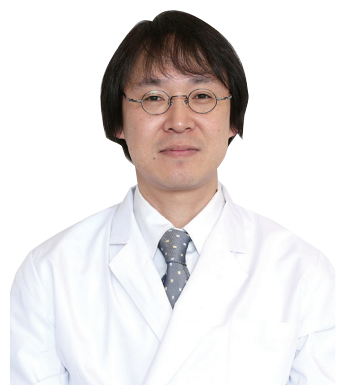


C型肝炎の内服剤治療法

社会医療法人全仁会 倉敷平成病院 内科部長
都築 昌之



【C型肝炎はどのような病気?】

1989年にC型肝炎ウイルスHepatitis C virus (HCV)の存在が世界に知られました。HCVが他人の血液から自分の血液に入り、それが肝臓の肝細胞に入り込むことで感染します。HCVが知られる前の時代での病院で手術を受ける時の輸血や、予防接種、民間療法の針治療でたまたまHCVが混ざっている血液が自分の血液の中に入ったという理由で感染したと推定診断されます。感染の初期には急性肝炎を起こしますが症状が軽くて知らないうちに慢性化(70〜80%)します。症状が強く出て黄疸や発熱、全身倦怠で入院された場合でも、血清肝炎などと診断されHCVに感染しているかどうかということとは当時の診療では分かりませんでした。最近でも、私が診察した患者さんの中には「大昔の事なのではっきり覚えていません」とか、「そんな昔の事を今頃お伝えしなくていいと思ってました」と言われる方もいらっしゃいました。その頃からC型肝炎が始まっていたと診断されます。

【C型肝炎はどのような病気?】

HCVは肝細胞内で増殖して肝臓全体の肝細胞に入り込み、血液中にも流れます。そして血液の白血球やリンパ球が免疫反応を起こし肝細胞を攻撃するので肝炎が起こります。肝細胞が破壊されるとその中からGOT、GPTが血液中に流れて出るので血液検査で肝炎と診断されます。ある程度破壊が進むといったん治まりますが、またHCVが増殖して新しい肝細胞に感染し、また肝炎が起こります。数か月のサイクルでくり返し、慢性肝炎として年数を経ていくと徐々に肝臓の中の線維化が進み、肝臓全体が固まって縮こまってきて、これ以上新しく肝臓の正常な構造を再生できなくなり肝硬変へ移行します。まれに肝臓が発生することもあります。

慢性肝炎の時期には自覚症状はほとんどありません。腹痛や嘔吐などもありません。ただ血液検査で異常がみつかるだけです。代償性肝硬変(肝硬変の初期)から進行し、非代償性肝硬変になると足のむくみや、黄疸、肝性昏睡(意識障害)などの症状が出て肝不全と診断されます。

【C型肝炎の抗ウイルス治療】

HCVを体内から排除する治療ですが、インターフェロン注射についてはご存知の方が多いでしょう。肝生検(肝臓に針を刺す・肝細胞の病理検査)のために入院し、注射が始まると毎日発熱や頭痛で苦しく有効率も良くなかったと知られていました。しかし今ではインターフェロンは使いません。HCVの増殖を抑制する内服剤が開発され治療法が大きく変わりました。入院不要、肝生検も不要です。外来で、感染しているHCVの遺伝子型(HCV genotype)を判定する血液検査と、CTかエコーで肝臓内部をチェックして治療の適合性を判定します。内服剤はDAA(Direct acting antivirals)と総称される薬の種類のうちから選択します。外来通院の内服処方12週間で飲み切り終了となります。薬の種類によつては12週間より長い場合もあります。90%以上の確率でHCVが消えてGOT、GPT値が改善し、肝炎の鎮静化と以後の肝障害の進行を防ぐ結果となります。内服終了後も経過観察の外来通院は必要です。この治療法はも

うすでたくさんの患者さんが受けて

れてHCVの排除が確認されています。中には80歳代後半の患者さんもおられました。今回初めてC型肝炎と診断された方の他、過去にインターフェロンを受けて効かなかった方や途中で中断してしまった方も治療の対象になります。岡山県に肝炎治療助成制度があり医療費助成の申請を行いますので岡山県肝炎一次専門医療機関に登録している医院または総合病院を受診する必要があります。ドックや会社の健診で肝機能障害を指摘された方、岡山県の肝炎ウイルス検診でHCV陽性を指摘された方は内科外来受診でのご相談をお勧めします。また、輸血歴のある方やご家族に肝炎の患者さんがいらっしゃる方、肝炎ウイルス検診を受けられたことがない方は一度血液検査されることをお勧めいたします。

